

かたろみみずの話～酒井明 説話集7※～

山道を歩いていると、青い大きなみみずがつるつるっとすべり落ちてくる。土を叩くと近くにいたものが顔を出す。時たま蛇と間違えて悲鳴をあげる人もある。こんなみみずが、かたろです。

このような名前がどうして付けられたのか、その辺定かな事は分からない。

うなぎはえ縄の餌にはもってこいというが、使ってみたことはない。

太いかたろうにかずらを通して輪にしたもので、雨上がり濁った谷川で流しているとうなぎがよく釣れる。じゅずぐりの一種で、これはよくやった。引き上げる時、草や木の葉に触るとすぐに離すので当てないことが要領である。捕まえた時、白い液をしゅっと飛ばすのが居るから眼や口を要心する。

みみずはたいそうつるつるしている。それが、化粧品になるだろうと研究している向きもある。

そんなことはさておいて、このかたろう君すべり落ちたらそれきりかといえば、なかなかどうして、小雨の降る日コンクリートを打込んだ谷川で彼の奮闘ぶりをとくと拝見したことだった。

体をだんだん下から上に伸ばして縮めてくねらせて、時間をかけて這い上がる。ほとんど直角でも4、50cmは這い上がるが、それ以上は無理とみた。斜面であれば何の雑作もないことで、元の土中に帰るだろう。

手も足もないのに、それがこんな所を這い登る。背中相変わらずの青色だがぴったり付けた腹の方は白みがかかった色になる。普段とは違った色の様子が見える。

ミミズの仲間になぜ魚が飛び付くのか。

なぜあんなにぬるぬるすべすべしているのか。

大奮闘の最中は背中と腹でどうして色が違うのか。

太陽に照らされると参ってしまうのはなぜだろう。

まだまだはっきりしないことはたくさんあるが、それでもみみずの利用度はだいぶ広がってきたことは間違いだろう。



※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会(当時)長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。